

# 歴史散歩

れきしさんぽ No.4

## 久留米市の天然記念物 1

水と緑の人間都市を標榜する久留米市は、市の花である久留米ツツジの生産地であり、植木発祥の地として知られる市東部の田主丸町を含めて、全国でも有名な植木の産地です。長い間人々によって育まれてきた郷土の風景は、緑豊かで個性的な景観を形成しています。

今回の歴史散歩では、市内に残る樹木等にスポットをあて、天然記念物として指定を受けているものを中心に紹介していきます。



宮崎八幡宮の大イチョウ

はこざきはちまんぐう  
1. 宮崎八幡宮の大イチョウ  
(昭和61年8月28日 県指定)

耳納連山に平行して走る国道210号線を市東部の大橋町常持の信号で北側に曲がって、県道蜷川じながわ草野線を北へ約1km走ると筑後川の支流巨瀬川が流れています。側の大橋小学校の南側には、今から約300年前、元禄11年(1698)に巨瀬川に架けられた石浦大橋が復原され、おおはし歴史公園として活用されています。

宮崎八幡宮は、更に北側の筑後川沿いに位置する蜷川集落の東端に所在します。鎌倉時代以来、山本郡一帯に勢力を誇った草野氏が建立したと言われ、祭神は応神天皇(誉田別命)です。

境内には、イチョウ、ケヤキ、クス等の樹木があり、境内の一部は久留米市民の森の指定を受けています。中でも樹高約25m、胸高の幹周り約5.5m、根元の周囲は約13mで、指定樹齢約400年と言われる大イチョウは樹形も良く古木の風格を備えており、福岡県の天然記念物に指定されています。

イチョウは、中国原産の雌雄異種しゅういしゅの樹木で、本来日本には自生していなかったと考えら

れています。伝播の時期については諸説ありますが、一般的には平安時代後期から鎌倉時代に日本に渡来し、全国各地に広まっていったとされています。

宮崎八幡宮のイチョウは実のつかない雄株です。平成3年の2度の台風までは樹形もよく、古木の堂々たる風格を備えていました。紅葉の季節には、黄色のみごとな色をつけます。

## 2. 柳坂曾根のハゼ並木 (昭和39年5月7日 県指定)

ハゼの実は、江戸時代より西日本地域の特産品で、18世紀前半から各地で栽培されていました。江戸時代の久留米藩でも、享保15年（1730）竹野郡亀王村（現田主丸町）の庄屋であった竹下武兵衛が初めて栽培し、宝暦年間頃に「松山ハゼ」を発見して他国にも普及しました。

久留米市内では、寛保2年（1742）に御井郡国分村や三潞郡西久留米村鞍内（西町）にハゼを植えたことが確認されています。その後、小郡の内山伊吉が優良種である「伊吉ハゼ」を生み出し、筑後のハゼの名声はますます高くなりました。

当時、全国の各藩は藩財政の立て直しのためにいろいろな殖産を計画し、特産品の販売に力をいれました。

久留米藩では、寛延3年（1750）荒地植立吟味役を設け、ハゼ苗を各村方へ提供し各地の空地や、荒地、曾根筋などへの植え立てを奨励しました。そして、収穫物の1/3を藩に納め、残りを地元にと与えました。ハゼの栽培によって、久留米藩の殖産興業に組み入れられた木ロウは、国産品として大阪方面に送られ藩財政を豊かにしました。

ハゼの実から製造する木ロウは、戦時中までロウソク、織物・木製品のつや出し、機械油など幅広く使用されてきました。最近では、クレヨン・カーボンペーパーなどの文具、口紅・ポマードなどの化粧品と共に、お相撲さんのマゲを結う「びんつけ油」など、その用途は多様化しています。

耳納山麓の多くの曾根筋に残るハゼは、江戸時代に植えられたものの名残で、特に柳坂曾根の並木は南北1kmにわたり残っており、代表的なものとして現在も地元の有志によって保存されています。

この柳坂曾根のハゼは、曾根の並木として、永勝寺への参道の並木として、又かぶと山登山道の並木として、道行く人々に四季を語り、特に秋は紅葉を彩り、筑後の風物詩となっています。

久留米が生んだ天才画家青木繁も、かつて、『わが国は、筑紫の国や、白日別 母います国、櫛多き国』と詠んでいます。

昭和39年には、約200本の並木が福岡県の天然記念物に指定され、秋の紅葉時期になると県内外からの見学者が多数訪れています。

最近ハゼの木は、いたるところで減少していますが、柳坂曾根の地元では「ハゼ祭り」等のイベントが企画実施され、地域づくりのシンボルとなっています。

平成6年には、新聞社の企画する新・日本街路樹100景に選ばれ、平成9年には（財）久留米総合管理公社の設立10周年記念事業として、この地のハゼの実から抽出した木ロウによって、高さ103cm、重さ75kgの日本一の和ロウソクが製作されました。



柳坂曾根のハゼ並木

### 3. 善導寺の大樟おおくす（昭和33年10月29日 県指定）

善導寺は、承元2年（1908）筑後在国司、押領使職であった草野氏の援助により、浄土宗開祖法然上人の高弟、大紹正宗国師聖光上人（鎮西上人）によって開山された古刹です。荘厳な本堂、大門、大庫裏、釜屋、書院、広間、役寮及び対面所、中蔵は国の重要文化財です。

境内に一際目立ってそびえ立つ樟が県指定の大樟です。聖光上人が植樹されたと伝えられ、樹齢800年以上という老樹大木で、善導寺境内の庭園樹としての趣を持っています。

樟は、暖地に自生するクスノキ科の常緑の高木で、九州地方には特に多い樹木です。

指定されている樟は、東側が1号木、大きい西側が2号木で共に幹回り10m以上、樹高20m程です。2号木の大きい方の幹には幅1.5m、長さ4mにわたって空洞があり、1号木にも幅1.3m、長さ1.5mの空洞がありますが、いたって樹勢は旺盛で、枝葉は境内を覆うばかりに生い茂っています。幹の上部の分幹している部分には、いずれもネズミモチの着生木がみられます。



善導寺の大樟

### 4. 善導寺の菩提樹ぼだいじゆ（昭和39年5月7日 県指定）

善導寺境内にはもう一つ県指定の天然記念物があります。境内の勅使門前と鐘楼の南にある菩提樹がそれです。

菩提樹は寺院の庭などに栽植されることの多い中国原産のシナノキ科の落葉高木です。通常15m位の大木になり、枝分かれしてよく茂り、小枝には星型の細毛が密生します。葉は短い柄があって互生し、ゆがんだ三角状ハート形をして、長さは6~10cm程です。果実は、ほぼ球形の小粒のもので灰褐色の毛が密生しています。また、この粒から数珠玉をつくるといわれています。

●勅使門前の菩提樹 樹高 7m 幹周 1m 枝張 4m

●鐘楼の南の菩提樹 樹高 12m 幹周 1.9m 枝張 3m



勅使門前の菩提樹

## 5. 梅林寺のソテツ（平成23年9月21日 市指定）

江南山梅林寺は、元和7年(1621)初代久留米藩主有馬豊氏が丹波福知山の瑞巖寺を移築した臨済宗妙心寺派の名刹で、有馬氏の菩提寺であり、九州を代表する修行道場としても知られます。

梅林寺には、重要文化財である絹本著色釈迦三尊像や県指定有形文化財の久留米藩有馬家霊屋など、多くの文化財が所在します。

梅林寺のソテツは、江戸前期に植えられた来歴がわかる古木であり、市内に例を見ない大樹です。

その根元には、このソテツに関する記念碑（円盤碑）があります。この記念碑から、このソテツが本来は篠山町の渡邊家にあったもので、明治から大正にかけて久留米餅の生産に大きく貢献した本村庄平によって、明治13年（1876）に境内地に移植されたことがわかります。また、碑文には、このソテツが200余年を経過したものと記載されており、現在までに既に300年を超える樹齢を持つ古木であることがわかります。なお、渡邊家は1200石の石高を持ち、久留米城外郭（四の丸）に屋敷がありましたが、この屋敷の庭に植えられていた樹木であることがわかることも重要です。さらに、明治10年代にはじまる梅林寺の復興の過程で行われた移植でもあり、一本のソテツが様々な経過を持って現在まで伝えられてきたという意味でも貴重な文化財であると言えます。

### ●梅林寺のソテツ 附円盤碑1基

本数（株数）：2本（株） ※元々は1本であったものが現在は2本に分離

樹高：3.6m

枝張り（基幹の拡がり）：南北8.5m 東西8.5m

基幹（頭数）の数：株立24本 ※根元から枝分かれしている幹数

主幹の大きさ（最大）：目周り 2.0m

雌雄の別：雌樹（株）



梅林寺のソテツ



円盤碑

◆歴史散歩 No.4（第2版）一部改訂

発行日：平成24年3月16日

発行：久留米市 市民文化部  
文化財保護課

〒830-8520 久留米市城南町15番地3

TEL 0942(30)9225

FAX 0942(30)9715